

新治小学校だより



ひびく心 はずむ体 見つめる目

～新治のよさを持続して生かしながら、
よりよい社会を創ろうとする子どもを育む学校を目指して～

令和5年度
12月号
令和5年11月29日



行事が育む力～緑区児童音楽会を終えて～

校長 川島 広子

11月になっても暖かい日が続いていましたが、さすがに12月目前ともなると寒くなってきました。いつのまにか学校のビオトープの周りを飛んでいた赤とんぼ（アキアカネやショウジョウトンボ）が姿を消し、その隣で美味しそうなみかんが実っています。子どもたちが霜柱や薄氷を手に嬉しそうに登校する日もそう遠くはなさそうです。

さて、10月11月は盛りだくさんの行事がありました。心のふれあいコンサート/神奈川フィルハーモニー管弦楽団（5年生）、ズーラシア遠足（1-2年生）、土曜参観わくわくデー（全学年）、梅田川遊水地かいぼり（3年生以上の希望者）、劇団四季観劇（6年生）、緑区小学校児童音楽会（3年生）、マリノスサッカーキャラバン（2年生）、霧ヶ丘学園とのスポーツ交流会（5年生）、全校遠足新治ラリー（全学年）、そして今月末は11/30から一泊で4、5年生が上郷森の家に宿泊学習に行きます。

行事は子どもたちにとって、実体験から多くの気づきや学びを得る場なのですが、やはり楽しくワクワクするものであります。例えば、ズーラシア遠足の前日は、何人もの1、2年生から「校長先生、ズーラシアが楽しみ過ぎる！」「嬉し過ぎて眠れないよー！」と話しかけられ、ワクワクが止まらぬ様子に微笑ましくなりました。

そんなワクワクする行事の中から、今回は緑区小学校児童音楽会について書きたいと思います。この音楽会は、緑区内15小学校の3年生4年生の代表が3日間に分かれて、歌やリコーダーなどの発表を緑公会堂で行うものです。実は私も昔は緑区の小学生で、このような音楽会に参加したのですが、なぜかその時のことを鮮明に覚えていて、修学旅行と同じくらい大きな思い出になっています。同級生と話していても音楽会は皆大きな思い出として残っていると言います。児童音楽会がなぜそんなに大きな思い出になっているのか理由を考えてみました。

1つ目は、いつもと違う洋服・いつもと違う場所でスポットライトを浴びて、知らない小学校の友達や先生方の前で自分たちの音楽を披露するので、物凄く緊張したから。でも、その緊張は嫌な緊張ではなくワクワクする良い緊張だったからだと思います。2つ目は、仲間とたくさん練習して、舞台上で仲間と一生懸命発表して、終わったあと仲間と「上手くできたね！」「楽しかったね！」と、達成感を感じあえたから。この2つの理由から、大きな思い出として大人になった今でも鮮明に記憶に残っているのだと思います。この緊張も、仲間との達成感も、そして他の学校の発表を聞いて上手いなあ、工夫しているなあと刺激を受けたことも、子どもたちにとっての大きな大きな成長になったはずです。

音楽会当日、新治小学校の3年生はリコーダー「Beginner's Five（喜びの歌、メリーさんの羊、ちょうちょう、ぶんぶんぶん、聖者の行進5曲のメドレー）」と、合唱「気球に乗ってどこまでも」の発表を立派に終えることができました。

音楽会終了後、「あーあ、終わっちゃった」「もっと歌っていたかったなあ」「今までできなかったのに聖者の行進が上手く吹けて涙が出そうになっちゃった」そんな声がかかしこから聞こえました。

特にリコーダー演奏は難しく、苦戦していた子どももたくさんいましたが、朝練や昼休みの練習、自宅での練習なども自主的に行ったことで、難しいパートをクリアしてどんどん上手になっていきました。できなかったことが自分の努力でできるようになり、それが嬉しくてもっともっとできるようになりたいと思い、自信がついていく様子は、学校教育の目指すべき「主体的な学び」の姿だと感じました。この音楽会で得た学びは、楽しかった思い出と共に一生残り続けるでしょう。

ビオトープの猩々トンボ

